

「風に聞け」

——ナイルの海戦とイギリス・ロマン派詩人——

アルヴィ宮本なほ子

I. 史実とフィクションの間に

1798 年は、英文学史ではワーズワス (William Wordsworth) とコウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) の『抒情歌謡集』 (*Lyrical Ballads*) が出版された年と記憶されるが、政治史ではイギリスとフランスの戦争が一つの大きな転換点を迎えた年である。1798 年 8 月 1 日夜から 2 日未明にかけて、海軍提督ネルソン (Horatio Nelson [1758–1805]) が率いるイギリス海軍がナイルの海戦 (アブキール湾の戦い)¹⁾ でナポレオンの東方進出の夢を打ち砕いたのである。海軍史の専門家のランバート (Andrew Lambert) は、ナイルの海戦とフランス艦隊旗艦ロリアン号の爆発について『オックスフォード英国人名辞典』 (*Oxford Dictionary of National Biography* 以下 *ODNB* と略記) で以下のように述べている。

[T]he Nile was far more than a naval battle: the scale and timing of the victory, coming at the darkest hour of the revolutionary war, transformed the national mood, elevated Nelson to the status of national hero, and helped to define the newly forged British identity while the catastrophic explosion of *l'Orient* symbolized the sublime character of Nelson's triumph. (*ODNB*, "Nelson's band of brothers [act. 1798]")

ランバートは、ロリアン号の爆発はネルソンの勝利の「崇高」性を象徴すると述べているが、敵の旗艦の爆発がイギリス海軍の勝利の崇高を象徴するとはどういうことだろうか。ロリアン号の爆発の原因は不明で、爆発の原因と艦長父子の運命については様々な説が当時から流布していた。コウルリッジは、1804 年から 5 年にかけてマルタ総督ボール (Sir Alexander John Ball [1756–1809])²⁾ の秘書としてマルタに滞在していた時、かつてネルソンの僚友だったボールと日々会い、様々な話を聞き、ロリアン号爆発を引き起こしたかもしれない「可燃性物質」について打ち明けられている³⁾。サウジー (Robert Southey 1774–1843) は、1813 年に出版され現在まで版を重ねる『ネルソン伝』 (*The Life of Horatio, Lord Nelson*) の中で、ロリアン号の爆発と艦長父子についての小さなエピソードを紹介している⁴⁾。ナイルの海戦から約 30 年後、ネルソンの死から約 20 年後の 1826

年、ヘマンズ (Felicia Dorothea Hemans [1793–1835]) は、おそらくサウジーの『ネルソン伝』を下敷きにし、しかし2つの改変を加えて、ロリアン号の艦長の息子の少年船員カサビアンカを主人公にした短詩「カサビアンカ」(“Casabianca”)を發表した⁵⁾。英米では、アンソロジー・ピースとして1行目の「燃え立つ甲板に立つ少年」で記憶され、多くのパロディを生んだ有名な作品である。

1826年は、ヘマンズの人気の絶頂期である。その年に發表され、代表作の一つとなった「カサビアンカ」には、現代の視点から見ると二つの大きな疑問がわく。なぜ敵国の少年を主人公とする詩を發表するのか。ロリアン号の大爆発が、現代の歴史家ランバートが述べるようにネルソンの勝利の崇高を象徴するとすれば、敵国の少年は、イギリスの勝利の崇高に対して、何を象徴するのか。この疑問を解決するために、本論では、ナイルの海戦の一次資料とこの歴史的な事件を扱ったイギリス・ロマン派詩人たちのテキストのいくつかを比較しながら、ヘマンズの「カサビアンカ」が史実(というものがあるとすればであるが)とフィクションの関係をどのように扱ったかを考察する。

II. カサビアンカと歴史的資料

ナポレオン戦争を専門とするヘイソーンウェイト (Philip J. Haythornthwaite) がナポレオン戦争に関わった著名人をまとめた *Who Was Who in the Napoleonic Wars* (1998) では、「カサビアンカ」とは、“Casabianca, Commodore Louis de (1762–98)”であり、次のように説明されている。

Best known as the subject of a poem, he was a Corsican who served in the French Navy during the War of American Independence, became a captain in 1792 and represented Corsica at the Convention. He achieved immortality as captain of the 120-gun *L'Orient*, Brueys' flagship, at Aboukir Bay. Conflicting accounts exist of exactly what happened, but supposedly his 10-year-old son Giacomo would not leave his wounded father, or vice versa, when the ship began to burn; other accounts suggest that they did leave but drowned before they could be rescued. The devotion of the son was the subject of Felicia Hemans' poem *Casabianca* which is perhaps better known by the first line, “The boy stood on the burning deck.”⁶⁾ (62)

ナポレオンの旗艦の艦長とその息子は、ヘマンズの詩によって不滅となったことがこの説明からもわかるが⁷⁾、カサビアンカ父子の最期について、ロリアン号から脱出したか、しなかったか意見が分かれている。また、船と運命を共にした場合、父と息子のどちらが重傷を負っていたのかについても説が分かれている。しかし、英語圏ではヘマンズの詩によってその名をとどめている「カサビアンカ」は、ヘイソーンウェイトの事典が立

項している父親の Louis de Casabianca ではなく、息子の “The boy [who] stood on the burning deck” (1) である。しかも、ナイルの海戦についてのイギリス海軍の側の資料には、カサビアンカ少年は殆ど出てこないのである⁸⁾。

(1) イギリス海軍の資料

ナポレオン戦争の時代のイギリス海軍の資料は、海軍関係者が編纂している。1795年から海軍の従軍牧師となったクラーク (James Stanier Clarke [1766–1834]) と、海軍の主計官かつ海軍提督フッド (Samuel Hood, first Viscount Hood [1724–1816]) の秘書官であったマッカーサー (John McArthur [1755–1840]) が協力して、1799年から1818年まで刊行した『海軍編年史』(*The Naval Chronicle: The Contemporary Record of the Royal Navy at War*) が最も重要な一次資料の一つとなる⁹⁾。1793年以降の海事全般——英国政府官報「ロンドンガゼット」(*London Gazette*) に掲載された提督へ報告された海戦の記録、諜報活動、ヨーロッパ諸国の文書、士官たちによる「哲学的文書」など——が編集者のコメントをはさんで掲載され、毎年1000ページ以上が出版され、戦争が終わり、海軍が戦闘に従事しなくなる1819年に出版を終えた (Tracy 1: vii)。

ネルソンを国民的英雄としたナイルの海戦について、当時のイギリスの人々は、1798年後半、「ロンドンガゼット」に転載された8月3日付のネルソンの戦勝報告急送書類、ネルソンが率いた艦隊の旗艦の艦長ベリー (Sir Edward Berry [1768–1831]) が上記のネルソンの報告急送書類と戦闘図をつけて刊行した *An Authentic Narrative of the Proceedings of His Majesty's Squadron under the Command of Rear-Admiral Sir Horatio Nelson, from its sailing from Gibraltar to the conclusion of the glorious Battle of the Nile, drawn up from the Minutes of an Officer of Rank in the Squadron* で詳しく知ることになった¹⁰⁾。ネルソンが戦死した1805年、クラークは海上生活に終止符を打ち、皇太子付きの牧師かつ司書となった。多くの時間を資料の整理にあて、1809年、マッカーサーが提供した資料や『海軍編年史』などを用いて、マッカーサーと共著の形で『海軍提督ネルソン卿伝』(*The Life of Admiral Lord Nelson*) をまとめる。これは、皇太子への献辞がある、最初の公式な『ネルソン伝』である¹¹⁾。また、ロマン主義の時代には公刊されなかったため、サウジーもヘマンズも作品執筆の際には参考にできなかったが、ナポレオン戦争の時に海軍少尉候補生として勤務した後に歴史家となったニコラス (Sir Nicholas Harris Nicholas [1799–1848]) は、それまで未公刊だったものも含むネルソンの公式な急送報告書と手紙に註をつけた *The Dispatches and Letters of Vice Admiral Lord Viscount Nelson, with Notes* を1844年から47年にかけて出版している¹²⁾。

(2) ロリアン号爆発についての資料

ロリアン号は、フランス艦隊司令官であった海軍中将ブリュイ (François-Paul Brueys

d'Aigalliers [1753–1798]) が率いる 120 砲門を備えた巨大な旗艦であり、ナポレオンのインド遠征のための資金や財宝を積んでいた (Nicholas 3: 110)。Clarke & McArthur では、爆発時の “this awful scene” がナイル河口の都市ロゼッタからどう見えたかについて、フランス人の目撃証言を複数のイギリス人軍人が聞いたものを載せている。

The firing was extremely brisk until a quarter after nine; when we perceived, by favour of the night, a prodigious light which clearly announced some vessel was in flames: at that moment the firing was brisker than ever. At ten o'clock the vessel which was burning blew up with a most tremendous noise. This was succeeded by utter darkness, and a most profound silence for about ten minutes. The time that elapsed between our seeing and hearing the explosion was two minutes. (2: 83–84)

ロリアン号のこの壮烈な爆発の原因は今もって解明されていないが、当時から大きく分けて二つの説があった。一つ目は、ロリアン号は塗装を済ませたばかりで、ペンキ缶を大量に甲板に置いたままにしており、そこに火薬の詰め綿が垂れ落ちていたというものである (Clarke & McArthur 2: 83 note.g)。二つ目は、「可燃性物質」によるというもので、誰が「可燃性物質」を持っており、誰が使ったのかによって当時から説が紛糾していた。これに関しては、コウルリッジが興味深い証言を 1810 年に公開している。ナイルの海戦から 5 年後、マルタ総督となっていたボールが、総督秘書のコウルリッジに、自分の艦船アレクサンダー号もそのような「燃焼物質」を積んでいたと明かした。コウルリッジは『朋友』(*The Friend*) に掲載したボールの死を悼むエッセイの中で、このことを取り上げ、「歴史に記録された最も崇高な戦争の事件」について今まで知られていなかったことを明かすと述べ、“This I received from Sir Alexander Ball himself” と言っている。

He[Ball] had previously made a combustible preparation, but which, from the nature of the engagement to be expected, he had purposed to reserve for the last emergency. But just at the time when, from several symptoms, he had every reason to believe that the enemy would soon strike to him, one of the lieutenants, without his knowledge, threw in the combustible matter; and this it was that occasioned the tremendous explosion of that vessel, which, with the deep silence and interruption of the engagement which succeeded to it, had been justly deemed the sublimest war incident recorded in history” (2: 294; 1: 549)¹³⁾

このコウルリッジの証言が非常に興味深いのは、「最も崇高な」歴史的イベントであるロリアン号の大爆発を、イギリス軍が「可燃性物質」(“the combustible matter”) を使って——あ

る意味軍人精神に悖るやり方で——引き起こしたと言っていることで、真相は藪の中ではあるが、イギリス海軍の公式見解とは異なる証言を1810年にわざわざ述べている点である。

コウルリッジやワーズワス、サウジーたちイギリス・ロマン派第一世代の詩人は、ナイルの海戦時には成年に達していたが、実際の戦闘に参加した体験は持たない。しかし、コウルリッジはマルタで総督のボールの秘書をしていた時、海軍軍人としてのボールの体験を個人的にかなり聞いていると推測され、ボールから聞いた海戦の実態にコウルリッジは戦慄したかもしれず、そのことが、ネルソンの公的な伝記『海軍提督ネルソン卿伝』が出て早々に、ボールの死の追悼エッセイを書く中で、海軍の負の側面を露わにする一文を付け加えさせることになったのかもしれない。『海軍提督ネルソン卿伝』では、ネルソン自身は負傷して艦内の医務室にいたためロリアン号の爆発については目撃していないことと、ロリアン号は旗を下げた後、つまり降伏してから出火したと記し¹⁴⁾、イギリス海軍が紳士的にふるまっていたとしている。しかし、補足情報として註で、ロリアン号の炎上沈没の直後にナポレオンがイギリス軍の「不当な」燃焼物質の使用に怒り狂ったという噂とイギリス軍がそれを使用したと批判するフランス士官たちの発言に対して、イギリス軍の艦内にあった「燃焼物質」は拿捕したフランス艦船のものであったという証言も掲載されている (Clarke & McArthur 2: 81, 83)¹⁵⁾。

サウジーは、『朋友』に掲載されたボールの追悼エッセイの他の部分を『ネルソン伝』に用いているので、コウルリッジが「燃焼物質」について書いた部分を知らないはずはなかったが、サウジーの『ネルソン伝』にはそれについての記載はない¹⁶⁾。いくつもの異なる説がある歴史的な事件を文学作品にすると、あるいは、伝記やルポルタージュのようなノンフィクションにすると、作者は異なる説をどのように選択し、どのように史実からフィクション (あるいはノンフィクションの作品) を作るのか、という問題はヘマンズだけのものではない。

(3) カサビアンカ父子の記録

ネルソンや彼の艦隊の艦長たちが報告した公式記録には、カサビアンカ父子の名前は無い。ヴァンガード号の艦長だったベリーが公刊したナイルの海戦の記録 *An Authentic Narrative of the Proceedings of His Majesty's Squadron under the Command of Rear-Admiral Sir Horatio Nelson* は、イギリス側からの記述で、ロリアン号の火事が “great rapidity” で船を包んだこと、ネルソンが炎上するフランス海軍旗艦ロリアン号から海へ飛び込んだ敵兵の救助を第一としたことなどは記されているが¹⁷⁾、旗艦の艦長父子についての記述はない。『海軍編年史』には、二つのフランス側の証言が英訳されて掲載されている。一つ目は、重傷を負って捕虜になったフランクリン号指揮官海軍少将ブランケ (Armand Blanquet du Chayla [1759–1826]) がアレクサンダー号でナポリに護送される途上で話したことの

英訳であり (1: 271-75)、カサビアンカ父子の消息が書かれている。

Commodore Casabianca, and his son only ten years old, who during the action gave proofs of bravery and intelligence far above his age, were not so fortunate; they were in the water, upon the wreck of *L'Orient's* masts, not being able to swim, seeking each other until three quarters past ten, when the ship blew up, and put an end to their hopes and fears. The explosion was dreadful, and spread the fire all around to a considerable distance. The *Franklin's* decks were covered with red hot seams, pieces of timber, and rope on fire. She was on fire, but luckily got it under. Immediately after the tremendous explosion the action ceased every where, and was succeeded by the most profound silence. (1: 273)

艦長のカサビアンカの息子は、名前は明かされていないが、10歳という年齢を「はるかに上回った勇敢さと知性」を示したが、父とともにマストにしがみついて洋上を漂い、ロリアン号の爆発で海の藻屑と消えたとされている。二つ目は、“*Naval Anecdotes*”のセクションに掲載されたパレルモの領事だったラシャヴァルディール (La Chavardiere) の手紙で、「フランスびいきの」視点でフランス的なスタイルで活き活き書かれているというコメントつきで掲載されている。

Admiral Brueys was wounded in the head and the hand, nevertheless he continued to command, till a cannon ball *cut him in two; he lived a quarter of an hour afterwards*, and would expire upon his deck. A moment afterwards the Captain of the Admiral's ship, Captain CASSA BIANCA, formerly a deputy, was mortally wounded by a splinter: this beautiful vessel then took fire, and every effort to extinguish it proved ineffectual. The young Cassa Bianca a boy of ten years old, who during the action had performed prodigies of valour, refused to escape in a boat, being unwilling to leave his wounded father: nevertheless he afterwards put his father upon a mast which was thrown into the sea; himself and the Commissary of the fleet were upon it when *L'Orient*, of 120 guns, blew up with a most horrible noise, and destroyed these unfortunate persons. The explosion was so dreadful that the town, which was four leagues distance, was shaken with it. . . . If the Government act properly, in my opinion, they will honour the memory of Admiral Brueys, of young Cassa Bianca, and all those brave men who died fighting. (1: 275-76).

この手紙は、まるで見てきたかのようにカサビアンカ父子の最期を記し、ヘマンズの作品と興味深い共通点、相違点が見られる。ブランケの目撃証言同様、カサビアンカの息子は10歳という年齢に不相応の武勇を示しているが、負傷した父を残して艦を去ること

を拒否した。しかし、最終的には、海に投げ入れたマストに父を乗せて脱出をはかるが、ロリアン号の爆発に巻き込まれて死んでしまう。ラシャバルディールは、壮絶な戦死を遂げたブリュイとカサビアンカ少年を特に挙げてフランス政府が悼むべき戦死者の中に入れていいる。カサビアンカ少年は、ここでブリュイとともに戦意高揚のシンボルとなっている。

クラークとマッカーサーによる『海軍提督ネルソン卿伝』は、上記の『海軍編年史』の二つの記述のうち、最初のもの——捕虜となったフランクリン号指揮官ブランケの証言——の引用を紹介している(2: 81-82)。『海軍編年史』所収のブランケの証言の英訳とほぼ同じである¹⁸⁾。では、当時のイギリスの詩人たちはナイルの海戦とその最も崇高な事件としてのロリアン号の爆発をどのように作品化したであろうか。

III. ナイルの海戦と抒情

(1) サザビーとボウルズの詩

ナイルの海戦の勝利の知らせがイギリスにもたらされた直後から、ナイルの海戦の大勝利を称える詩が次々に発表された¹⁹⁾。ここで、特に注目したいのは、1799年に出版された二つの詩作品である。翻訳家として名をあげ、詩人としても知られたサザビー(William Sotheby [1757-1833])の比較的よく知られた詩、*The Battle of the Nile, A Poem: By William Sotheby, Esq.*は、海軍第一卿(海軍大臣)第二代スペンサー伯爵(George John Spencer, second Earl Spencer [1758-1834])に捧げられている。サザビーの二番目の息子チャールズ(Charles Sotheby [1782-1854])は、1795年13歳でイギリス海軍に入隊し、ナイルの海戦に海軍少尉候補生として参戦している²⁰⁾。サザビーの作品は、海軍の関係者でもある詩人の著作であり、イギリス海軍史に刻まれる栄光の勝利を公的に示すことに極めて意識的で、エピック(叙事詩)調で書かれ、海軍資料に註で言及している。最も特徴的なのは、諜報活動によって奪取されたフランス軍の機密文書をフランス語のまま引用している点であろう(Sotheby 2, 3, 24)²¹⁾。詩の冒頭につけた註でそのような手紙が引用されるので(24)、ギリシア・ラテンの古典文学の故事の引用やアリュージョンに交じって現実の戦争の現代性が浮かび上がる。

サザビーの作品と対照的なのは、コウルリッジに大きな影響を与えることになるボウルズ(William Lisle Bowles [1762-1850])が同年出版した*Song of the Battle of the Nile. Published for the Benefit of the Widows and Children of the Brave Men who Fell on that Memorable Day, and Humbly Inscribed to the Gentlemen of the Committee*である。戦争のような公的な崇高な題材に「ソング」というジャンルの階梯から考えると低い形式を選んでいる点で、従来の戦争を題材とする詩の有様に対抗するものであるが、当時の基準から言えば正しくない形式を選んだと取られうることを、ボウルズは、もちろん、自覚しており、頭注

で、タイトルの“Song”について“I need not say that Song, in this place, is used in its highest sense, as a Lyrical composition”と述べている。戦争にエピック（叙事詩）ではなく、リリック（抒情詩）である「ソング」を用いる。そして、そのリリックの受け取り手は、サブタイトルで示されているように、「あの記念すべき日に斃れた勇敢な男たちの残された妻や子どもたち」なのである。この点の重要性を強調するのであれば、ワーズワスやコウルリッジよりも少し早く生まれ、当時は有名な詩人として名を馳せるが後世ではマイナーなロマン派詩人とみなされることになるボウルズは、戦争を描くのに「ソング」という抒情的な形式を選び、その受け取り手を戦死した男たちの残された妻や子とすることで、イギリス・ロマン主義の時代以降の戦争詩の描き方に新しい指針を示す道を開いたと言える。

Song of the Battle of the Nile は、基本的に出来事を追って記述し、10のセクションで構成されており、セクション6の最後にロリアン号の爆発が描かれている。

What bursting flame

Lightens the long tract of the gleamy brine?

From yon proud ship it came —

That tow'r'd the leader of the hostile line!

Now loud explosion rends the midnight air!

Heard ye the last deep groaning of despair? —

Heaven's fiery cope unwonted thunders fill,

Then, with one dreadful pause, earth, air, and seas are still! (8)²²⁾

詩の本文ではロリアン号という名称は出てこないのであるが、“Loud explosion rends the midnight air.”につけられた註では、“The burning of the L'Orient.”と説明されている(15)。重要なのは、「爆発の轟音が真夜中の空を引き裂く」の次の行で語り手が“*Heard ye the last deep groaning of despair?*”と尋ねている「あなた方」とは、読者の中でも特にこの作品のサブタイトルで示されてる「あの記念すべき日に斃れた勇敢な男たちの残された妻と子どもたち」であり、「最期の深い絶望の呻き声」を発しているのはロリアン号と共に沈んだ敵のフランスの兵士たちであることである。ここには、ボウルズの、戦死者の家族を慰める気持ちと敵国フランスへの憎悪の両方が見られる。そして、このような感情は、戦争をリアルタイムで経験している人々の感情と同調するものであり、それは、ナイルの海戦から約30年後、ヘマンズがやはりリリックというモードを選んで「カサビアнка」を書いた時に対応を迫られる大きな問題として立ち現れることになる。

(2) サウジーの『ネルソン伝』

サウジーが桂冠詩人となり *Life of Horatio, Lord Nelson* を出した 1813 年は、6 月のビトリアの戦いの勝利で、イギリス軍の半島戦争での決定的優位が確立した年であった。サウジーの『ネルソン伝』は、今日まで版を重ね、当時から現代まで最もよく読まれたネルソンの伝記である²³⁾。内容は、クラークとマッカーサーの『海軍提督ネルソン卿伝』をまとめたものであるが、海軍の内情や海事用語なども含めて主題について専門家とはいえないサウジーの伝記がこれほど読まれることになったのは、長く続いた半島戦争が 1813 年に転換点を迎えたことに加えて、サウジーの桂冠詩人として文学的名声と文章力によるところが非常に大きかった。ロリアン号の爆発の部分については『海軍提督ネルソン卿伝』とほぼ同じである。ロリアン号の火災の原因は“the oil-jars and paint-bucket [that] were lying on the poop”であり、ヘマンズがまるで映画のように入念に描写している船を覆った炎は、簡潔な“The flames soon mastered the ship”という一文のみであるが、ロリアン号の爆発は、前例のない「崇高」な事件として描かれている。

About ten o'clock the ship blew up, with a shock which was felt to the very bottom of every vessel. . . . This tremendous explosion was followed by a silence not less awful. The firing immediately ceased on both sides; and the first sound which broke the silence was the dash of her shattered masts and yards falling into the water from the vast height to which they had been exploded. It is upon record, that a battle between two armies was once broken off by an earthquake. Such an event would be felt like a miracle. But no incident in war, produced by human means, has ever equaled the sublimity of this co-instantaneous pause, and all its circumstances. (138-39)

サウジーは、ロリアン号から救出された約 70 名と海に沈んだ大多数の対比の中で、カサビアンカ父子に関してはわずかだけ言及している。“Among the many hundreds who perished, were the Commodore, Casabianca, and his son, a brave boy only ten years old. They were seen floating on a shattered mast when the ship blew up” (138). そして、近くのイギリス船に降り注ぐロリアン号の燃える残骸の対処に関してアレクサンダー号艦長のボールの示した“foresight”について、コウルリッジが『朋友』に掲載したボールの追悼エッセイで書いたものと全く同じ文章で述べるが、コウルリッジが暴露した「燃焼物質」についてはふれていない (Southey 138-39; Coleridge 1: 548-49)。サウジーは、カサビアンカ少年の「実年齢よりはるかに上の」勇敢さと賢さについて称えたフランス側の証言も収録していたクラークとマッカーサーの『海軍提督ネルソン卿伝』(2: 82) も含めて、カサビアンカ父子の最期について、いくつか英語で読んでいた。しかし、サウジーは、「カサビアンカ提督とその息子、僅か 10 歳の勇敢な少年」は、「ロリアン号が爆発した時に折れたマスト

に乗って波間を漂っているのが目撃された」と書くことを選択し、また、ボールがコウリッジに明かした秘密は書かないという選択をした。海軍士官学校教授であったカレンダー (Geoffrey Callender) は、サウジーの『ネルソン伝』を編集するにあたって、この部分にヘマンズの詩についての注釈を入れている。“The poem by Felicia Hemans, so oft derided, is fictitious in every particular save that both father and son met their death” (Southey, *Southey's Life of Nelson* 139 n. 1)。だが、サウジーもまた、いくつかの歴史的資料から選択して彼の考えるロリアン号の最期の場面を構築している。サウジーが「フィクション」を避けるために簡潔な表現「僅か 10 歳の勇敢な少年」という言い方をしたのだとすれば、そして、ヘマンズがサウジーの『ネルソン伝』のこの部分を読んでいたらとすれば、そのあまりの簡潔さがかえってヘマンズの想像力を刺激したのかもしれない。

IV. ヘマンズが“Casabianca”を書くまで

フェリシア・ヘマンズは、実に多作な詩人で、1808 年に 15 歳で最初の *Poems* を出版して以来、当時勃興し始めていた一般大衆の読者層をターゲットに、生前、20 巻の詩集を出版し、約 400 の詩を雑誌や年鑑に発表した。1820 年代後半、バイロン (George Gordon Noel, sixth Baron Byron [1788–1824]) の死からテニソン (Alfred, first Baron Tennyson [1809–92]) の台頭までの間、ヘマンズは最もよく読まれた詩人であった (Sweet and Melnyk 1)。1793 年、Felicia Dorothea Browne としてリヴァプールで生まれたヘマンズは、バイロンやシェリー (Percy Bysshe Shelley [1792–1822]) と同様、ロマン派第二世代である。しかし、いくつかの点で彼らとは大きく違っていた。まず、家族にナポレオン戦争に参加した軍人が三人——二人の兄と夫——もいた。さらに大きな違いは、女性であったヘマンズは、早くも 19 世紀前半に現代も女性が直面している家庭と職業の両立の問題を、女性が詩人という職業を持ったことに付随する困難として生きた²⁴⁾。そして、20 世紀英文学の正典に列したロマン派の男性詩人たちと異なり同時代の他の女性詩人同様、20 世紀にはほぼ忘れ去られた。しかし、1980 年代後半、Stuart Curran が女性詩人の再評価の先鞭をつけたときに、ランドン (Letitia Elizabeth Landon [1802–38]) と共に大きく扱われることになった (Curran 189)²⁵⁾。

1798 年の「ナイルの海戦」当時はヘマンズはまだ 5 歳であったが、12 歳になっていた 1805 年のナポレオンの海上制覇とイギリス本土侵略の夢を潰えさせたネルソンのトラファルガーの海戦での勝利と死は、ヘマンズにとって深い印象を残したはずである²⁶⁾。サウジーの『ネルソン伝』では、当時のイギリス国内ではネルソンの死は大事な友人の死であるかのように受け取られたと伝えている。“The death of Nelson was felt in England as something more than a public calamity. Men started at the intelligence and turned pale, as if they had heard of the loss of a dear friend” (Southey, *Southey's Life of Nelson* 321)。マルタ島からの

帰国の途上でナポリにいたコウルリッジも同様の反応を『朋友』で回想している²⁷⁾。フェリシアにとってこの出来事がさらに印象深く刻印されることになっただろうと思われるのは、トラファルガーの海戦から1週間後の10月28日、6歳年上の一番上の兄で、最終的には陸軍中将 (Lieutenant General) とバス勲爵士となるトーマス (Sir Thomas Henry Browne KCH [1787-1855]) が英国陸軍の最下位の下士官である歩兵少尉として王立ウェールズフュージャリア連隊 (Royal Welch Fusiliers) に入隊し、ノヴァ・スコシア、マルティニーク島と転戦する²⁸⁾。トラファルガー海戦に敗れたナポレオンは、大陸封鎖令によってイギリスとヨーロッパ諸国の断絶を図り、それを実効化するため、1807年秋、スペインとポルトガルに進軍した。1808年、ウェリントン、ポルトガルに上陸し、以来、フランス軍と様々な場所でぶつかるようになる。兄たちを戦場に送っていたヘマンズは、1809年、ナポレオンに対抗する戦争を支持する *England and Spain; or Valour and Patriotism* を出版し、また、兄たちを通じて、半島戦争に従軍していたヘマンズ大尉と知り合い、彼がスペインに戻る前に愛を誓った。 *Domestic Affections & Other Poems* を出版した1812年、ヘマンズと結婚し、夫がノーサンプトンシャーの民兵に登録していたためノーサンプトンシャーのダヴェントリに転居し、長男の誕生後、夫が除隊したので、母のいるウェールズへと再び転居した。夫は除隊したが、二人の兄は、半島戦争に参戦している。長兄トーマスと同じ王立ウェールズフュージャリア連隊に所属した次兄のジョージ (Sir George Baxter Browne CB)²⁹⁾ は、半島戦争で重傷を負って一旦帰国するが、再び戦列に参加し、トーマスは、ウェリントンがフランス軍を破った7月のサラマンカの戦いから1814年4月のトゥールーズの戦いまで激戦に参加し、この間1813年6月のビトリアの戦いでは、頭部に重傷を負い、フランス軍の捕虜となるも、第十五王立騎兵隊に救助されるというような劇的な体験もしている。

1815年、ナポレオン戦争終結後、多くの軍人は休職扱い (half-pay) で、故郷に戻り、22年続いた戦争は徐々に忘れられていくことになる。ヘマンズは、1816年——シェリーやキーツが文学界に実質的なデビューをする年——以降、毎年詩集を出し、詩を定期刊行物に掲載し、有名詩人への道を歩み始める³⁰⁾。その名声は年ごとに高まり、1820年、バイロンは、自分とヘマンズの両方の版元であったマリー (John Murray [1778-1843]) に出した手紙で、自分と人気を二分するヘマンズへの苛立ちを冗談半分、本気半分で語っている。バイロンは、ヘマンズの名字に「男性」が隠れていることを “woman” と “your feminine *He-Man*” を押韻して示し、“I do not despise Mrs. Heman[s] — but if [she] knit blue stockings instead of wearing them it would be better” とつぶやいている (183, 182)。

バイロンの不快感は、ヘマンズが詩人として名声も富も勝ち得ていることに対する嫉妬でもあるが³¹⁾、女性詩人が男性詩人の領域に入っていることにある。ルーテンズ (Tricia Lootens) は、ヘマンズは *England and Spain: or Valour and Patriotism* 以降 “a national poet” として創作していたと論じるが (2)、「国民詩人」としてのヘマンズのナポレオン戦争に

対する態度は、1810年代、終始反戦／反体制的な態度を堅持したバイロンやシェリーとは対照的である。しかも、ヘマンズは、イギリスの戦争介入批判を文明の西進説を基盤とした予言と絡めてエピック的に提示した *Eighteen Hundred and Eleven, a Poem* (1812) で、政治の領域を主題としたことで批評家たちから激しい批判を浴び詩人としての筆を折ることになったバーボルド (Anna Laetitia Barbauld [1743–1825]) と異なり、「戦争」を主題とした詩も書きながらも、多くの読者たちの支持を得て大詩人にのし上がっていった。そして、その人気の絶頂であった1829年、*Edinburgh Review* を創刊し非常な影響力を誇った批評家ジェフリー (Francis Jeffrey [1773–1850]) は、*Records of Woman* の第二版と *The Forest Sanctuary* の書評の中で、ヘマンズのエピック的な長詩に、バーボルドが浴びたのと同じ趣旨の批判——女性詩人は女性の領域で詩を書くべきである——を鋭い矢のように放つ³²⁾。しかし、バーボルドに詩人としての筆を折らせた男性批評家からの非難は、1829年には、いかにジェフリーの舌鋒が鋭くとも、人気と地位を確立していたヘマンズを揺るがせないのである。女性 (詩人) が扱ってよい主題、ジャンルの問題の縛りは、ヘマンズが1826年に——1824年のバイロンの死後ヘマンズは当代随一の詩人となっている——30年前のナイルの海戦をフランス軍の少年をタイトルに据えて、エピックではなく掌編の戦争詩「カサビアンカ」を発表したこととどのように関連するだろうか。

V. “Casabianca”

“Casabianca”の初出は、『マンスリー・マガジン』 (*The Monthly Magazine, or British Register, of Literature, Science, and the Belles-Lettres*) の1826年8月号で、“F. H.”と署名されていた。1829年にヘマンズ自身の詩集『森の聖域』 (*The Forest Sanctuary*) の第二版に再録され、その翌年『詩歌集』 (*Poetical Album*) に再び収録された。『森の聖域』は、1825年にマリーから初版が出る。この詩集は、非常な成功を収めたので、1829年に版元をブラックウッドに変えて第二版が出版された時にブラックウッドは100ポンドの前金を払っている (*Selected Poems* xxxix)。1825年頃から2年ほど、マリーは、新しく創刊した新聞の失敗から深刻な財政危機に陥り、旅行記などの得意分野に特化し、新しい詩集の出版を控えるようになっていたので (Feldman 159, 161)、ヘマンズは1826年から1827年は雑誌への掲載に熱心である一方、1819年から関係を深めていたブラックウッドから次の詩集を出す方向を探っていた。ブラックウッドは1828年、ヘマンズに高額の原稿料を払って *Records of Woman* を出して大成功を収め、*The Forest Sanctuary* の新しい版に新しい詩を追加して出すことを提案する (Feldman 164, 165–66; Blackwood Archives, National Library of Scotland, MS 30, 311, f.46)³³⁾。

1826年、ヘマンズの“Casabianca”のタイトルとなった人名をイギリスの読者のどれだけが知っていたであろうか。歴史的人物として知っていたとすれば、ナイルの海戦で大

爆発したフランス艦隊旗艦ロリアン号のナポレオンの同胞のコルシカ出身の艦長ルイ・ド・カサブランカと結びつけるだろうが、サウジの『ネルソン伝』のロリアン号爆発の場面を覚えている読者は、ヘマンズの詩の冒頭の“The boy stood on the burning deck / Whence all but he had fled” (1-2) から、ロリアン号艦長の息子であった士官候補生——サウジが“a brave boy only ten years old” (139) と書いた少年³⁴⁾——を想起するだろう。ヘマンズ自身は、「カサビアンカ」が誰であるか知る読者は多くないと考えていて、タイトルに註をつけて「カサビアンカ」が誰であるか説明している。だが、ヘマンズは、この註でサウジが海軍の資料の資料に従って 10 歳としている少年の年齢を“thirteen” (*Selected Poems* 429 n. 1) とし、詩の結末では、少年はロリアン号とともに微塵に砕け散っている。イギリス・ロマン主義の文学研究では、ヘマンズの出典をおそらくサウジの『ネルソン伝』と考えるのであるが、上記のような重大な違いが二つある³⁵⁾。

ヘマンズが「カサビアンカ」を書く時に参考に読むことが可能であったナイルの海戦についての英語の文献の主なものは、海軍の艦長たちの公式の手記、『海軍編年史』、クラークとマッカーサーによる『海軍提督ネルソン卿伝』、コウルリッジが『朋友』に掲載したボールに追悼記事、サウジの『ネルソン伝』である。サウジの『ネルソン伝』はおそらく読んでいたと思われるが、どの文献に関しても、読んでいたかどうかは推測の域を出ない。ヘマンズが『海軍編年史』と『海軍提督ネルソン卿伝』、あるいはどちらか一方を読んでいたとすれば、そこに収録されたフランス軍提督の証言「実年齢よりもはるかに上の勇敢さと賢さ」を考慮に入れて、カサビアンカ少年の年齢を「13 歳」としたのかもしれないが、詩のテキストは、ヘマンズ自身がわざわざつけた註の説明に反するかのようには“the gallant child” (31) の幼さ、純真な気高さ、雄々しさを最初から印象づける。

Yet beautiful and bright he stood,
 As born to rule the storm;
 A creature of heroic blood,
 A proud, though child-like form. (5-8)

少年の「幼さ」は、少年が三度、自分の任務について、上官ではなく、大文字の Father へと問うている点にも読者の注意を向けさせる (14)。ヘマンズが註で説明した 13 歳という少年の年齢は、幼い少年が燃え盛る炎に竦んでしまって、“all but him had fled” である甲板で動けなくなっているという可能性を否定するのであるが、“Without his Father’s word” では何もできない少年は、戦争が終わっている 1826 年という時点のために、命の危険よりも盲目的に命令に従うことが優先される軍隊の規律をより疑問視する視点を与えうる (2, 10)。しかも、語り手は、少年が知りえない事実、「父」は致命傷を受け昏睡

状態のため少年の声が聞こえないことを読者にだけ明かしている。“That Father, faint in death below, / His voice no longer heard” (11-12)。ここで、「父」が、少年の父、「彼の父」と書かれず、「あの」父と書かれて、「あの父」以外の父がいるような印象を読者に与えるが、少年の父の許可を求める声が二度、三度と繰り返されるにつれて、少年の問いかけは、甲板の下のどこかにいる艦長の「あの父」に向けられているというよりも、天上にいる大文字の Father 「神」へと向けられているように思われてくる³⁶⁾。

しかし、少年の絶望的な問いに、いかなる「父」も答えることはなく、その代わりに、急速に燃え広がってゆく炎が無言のまま少年に別の答えを迫る。ロリアン号を覆っていく紅蓮の炎の描写は、戦争の「崇高」を表現しているかもしれないが、その破滅の炎に包まれる小さな「勇敢な子ども」は、「崇高」なのだろうか。

They [flames] wrapt the ship in splendor wild,
They caught the flag on high,
And streamed above the gallant child,
Like banners in the sky. (29-32)

少年の三度の呼びかけに答えるのは、ロリアン号爆発の大音響である。“There came a burst of thunder sound —” (33)。そして、ここで、ヘマンズとボウルズの語り手の反応の違いが、ヘマンズの詩を解明する手掛かりとなる。ボウルズの *Song of the Battle of the Nile* では、“Loud explosion rends the midnight air” の次の行で語り手は、夫や父を失ったイギリスの妻や子たちに“*Heard ye the last deep groaning of despair?*”と尋ねる (15)。真夜中の空を貫いた大音響と海の藻屑と消えた敵の旗艦の乗組員たちが発した最後の絶望の声を聞かせることで「あの記念すべき日に斃れた勇敢な男たち」の死は無駄ではなかったことを示すのである。ヘマンズの詩では、ロリアン号の大爆発の直後に語り手の取り乱した声が挿入される。“The boy — oh! Where is he?” (34) 「勇敢な子ども」は、ロリアン号と同様に爆風に吹き上げられバラバラに砕け散るのであるが、海に沈んだフランス人たちの「最後の絶望の声」を聞いたかとイギリスの読者に尋ねることがロリアン号の乗組員の安否を気遣うこととは別の目的を持っていたボウルズの語り手と異なり、ヘマンズの語り手は、砕け散った少年とロリアン号の残骸を吹き散らす風に聞けとイギリスの読者に人為的な破壊の爆風を想像させる。“Ask of the winds that far around / With fragments strewed the sea!” (35-36)。

ウルフソンは、この作品の初出時である 1826 年に、ナイルの海戦についてフランス軍側のエピソードを中心とした詩を発表することは、「大胆な仕掛け^{キャンビット}」であると指摘している (*Selected Poems* 428)。ナイルの海戦から約 30 年、トラファルガーの海戦とネルソンの死から約 20 年、ナポレオン戦争の終結から約 10 年を経た 1826 年には、戦争は過去の

ものになったとはいえ、まだフランスへの敵対心は薄れてはいない。だが、22年続いた戦争も少しずつ忘れられていく。二十世紀末に『海軍編年史』を編纂したトレイシー(Nicholas Tracy)は、第二巻の「序文」で、1799年以降の『海軍編年史』の価値を高めたのは、1798年より前を振り返る記述と現在進行形の戦争のルポルターージュが様々な形で収録されていることであるとする(Tracy 2: vi)。この一大編集事業は、ナポレオン戦争の終結後も出版は続くが、平和になり海軍の軍事行動がほぼなくなった1819年にはその役割を終えた(Tracy 1: vii)。

戦争も軍事行動もなくなった後、戦争について文学テクストが行うことは何であろうか。ヘマンズは、「カサビアンカ」を発表する3ヶ月前、1826年5月に、「輝く都市」(“The Illuminated City”)—1814年夏、ナポレオンの敗北とエルバ島への流刑、つまり戦争の終結を祝い、ロンドンに新しく設置されたガス燈が全て灯された——を発表し³⁷⁾、祝賀気分には沸くロンドンで、只一人、戦争の悲惨さを忘れられない語り手が街を彷徨いながら、“Didst thou meet not a mourner for all the slain?” “Didst thou hear, midst the songs, not one tender morn, / for the many brave to their slumbers gone?” (17, 23–24)と読者に問う。「カサビアンカ」では、ヘマンズはさらに先に進んで、戦争の悲しみと戦争が忘れられることの危惧を歌うだけではなく、敵国の少年の運命にイギリスの読者が心を寄せ、そこからさらに先を進めるかを問う。史実に改変を加え、カサビアンカの名前をタイトルと註だけに記し、詩のテクストでは固有名詞を排除して普遍的な場面を描くという仕掛けを施し、戦争の崇高を問ひ直し、敵・味方を越えて戦争に巻き込まれて死ぬものへの哀悼を受け入れられるか、イギリスの読者に大きな問いかけをしているのである。

「カサビアンカ」の語り手は、『海軍編年史』が収録したカサビアンカ少年についてのフランス側の記述のように、ロリアン号と運命を共にした少年を英雄として、あるいはあるべき戦士として称揚することはしない。語り手は、少年の英雄的行為を永遠化したりせず、作品の最終行で、この海戦で失われた最も貴重なものである“young faithful heart”を悼み、その幼さゆえに「父」なる権威に忠実に従ってしまう危うさを脱して成熟する時間がないまま滅びてしまうことを悲しむ(40)。ロリアン号の大爆発は、ナイルの海戦当時も今も「崇高」という言葉で表現されることは先に見た通りであるが、戦争の「崇高」というものがあるとして、勝利した戦争の「崇高」な場面を描くエピックでもなく、戦死したイギリス兵士たちの遺族を慰めるために敵艦の爆発音と絶望の声を聞かせる「ソング」でもないものを書くためには、30年という年月だけでは十分ではない。ロリアン号の大爆発の崇高さに、小さな少年が「父」の命に従って粉々に砕け散ってしまうことを対置させているヘマンズは、この海戦に参加した軍人の手による記録——英仏どちらの側のもので——やイギリス・ロマン主義の男性の詩人たちが見聞した、あるいは想像した戦争とは全く違う視点を戦争に導入している。史実として砕け散ったロリアン号のマストの残骸からネルソンの棺が作られたことを知っている読者には、ヘマンズはさ

らに仕掛けをしている。ロリアン号のマストの破片の多くが降り注いだスイフトシュア号のハロウエル艦長 (Benjamin Hallowell [1760-1834]) は、マストの残骸から作った棺を栄光の戦利品としてネルソンに送った。ネルソンが夕食の時に座る椅子の後ろの隔壁に立てかけていたこの棺がネルソンの遺体をトラファルガーから運ぶことになるのだが、ネルソンはこの棺では埋葬されず、棺は小片に分解され遺品として人々に分け与えられた (Nicholas 3: 88 Southy 141-42)。ヘマンズは、ロリアン号の破片 “part” に少年の “heart” で韻を踏ませ (38, 40)、軍艦の破片を戦利品とするのではなく、マストとともに碎け散ったカサビアンカ少年の心臓の小片を戦争の惨禍を伝えるメメントとしてこの作品から読者へと持ち帰らせる。

この作品は、好戦的な愛国歌か反戦歌か。ヴィクトリア朝から二十世紀前半までの受容をみれば明らかに前者として受け取られたのであるが、大衆受けするような鮮やかな視覚的イメージが多いために判断が難しいところもあるが、主人公の少年がイギリス人の士官候補生であれば、彼の心臓の小片は、戦いを継続するためのメメントとなるだろう。しかし、詩の中で固有名詞が全く使われていないので、特に後世の読者は忘れがちであるが、ここで船と運命を共にするのは、イギリス海軍の若い士官候補生ではなく、フランス軍旗艦の艦長の息子の士官候補生なのである。ヘマンズがこの少年の出自を詩のテキストの中ではっきり書いていないことがこの詩の正反対の評価を生むことになるが、この少年を敵国の少年としたことによって、ヘマンズは、語り手とともに「あの少年はどこに？」と気遣った読者を、敵／味方という二分法を越えたところへと誘う。読者は、フランス人少年のカサビアンカの運命に、戦争で若い少年の命が奪われる構造、つまり、戦争で “young faithful heart” (40) を殺すのは、敵だけではなく権威ある「父」の命令へ盲従させる国家や宗教の構造を見るのである。このことを読者に知らせる語り手は、ナイルの海戦の数あるエピソードの中からイギリス海軍の英雄的行為ではなくフランス人少年の小さなエピソードに心を震わせる人間である³⁸⁾。ヘマンズの作品が、イギリス海軍の記録、イギリス・ロマン派の男性詩人たちの作品とは対照的であるという点を強調するとすれば、最も重要なことは、この詩の語り手の声は、男性の声ではなく、詩人ヘマンズ自身とほぼ同一視できる女性の声であり、戦争や英雄を「崇高」として叙事詩的に提示するのではなく、敵／味方の二分法を無効にする戦場の風景、敵への追悼を読者に迫るイメージを女性の領域である抒情詩を使って提示したことであると言えよう。

VI. テクストの外へ

ヘマンズは、敵国の少年士官の年齢と最期をサウジーの『ネルソン伝』、あるいは史実とは変えて、敵も味方も命を落とす戦争そのものを問う壮大なヴィジョンを紡ぎ、戦争のない時代の構築へと人々の眼を向けさせようとした。それが可能だったのは、ヘマン

ズが当時最も売れている「国民的詩人」だったからであるが、多くの読者を持つヘマンズが、ネルソンを国民的英雄にしたナイルの海戦の戦闘的な崇高に、フランス人の少年の崇高性、悲劇性を対置させることでそのような構図自体の虚しさを作品に潜ませただとすれば、この詩のその後の受容史は 20 世紀後半までは非常にアイロニックである。

時代が下がり、ナイルの海戦が遠くなればなるほど、また、この詩がアンソロジー・ピースとしてよく読まれ、小・中学校で暗唱されるほどになるにつれて、ヘマンズの自註が落ちて、タイトルではなく 1 行目の「燃え盛る甲板に立つ少年」がこの詩を指すようになった。この少年はイギリス人の少年として読まれ、好戦的な愛国主義の歌としてヘマンズの最も有名な作品となり、かつ最もパロディ化され、また最も批判され、忘れられた。しかし、1980 年代以降のイギリス・ロマン主義時代の女性詩人たちの復権の中でだけでなく、もっと大きな文脈の中でも、ヘマンズの「カサビアンカ」は、作者のジェンダーの問題、歴史とフィクションの境界の問題、作品の興味深い受容史など多くの重要な問題を提起する。同じ島国でも陸地での合戦に人気が集まる日本の時代小説とは違って、イギリスではネルソンの時代の海戦が歴史小説の中で最も人気の高いものの一つである。そして、「帆船の時代」の軍記物は、作者も主要人物も——実在の人物も架空の人物も——ほぼ全員男性であり、女性の活躍する余地は殆ど全くない。それらは、戦いの中で鍛えられる海軍士官の成長の物語なのであり、その物語を胸を熱くして読む読者の多くは、おそらく男性である。自分が参加しない、遠い戦争へ、女性詩人ヘマンズの詩的想像力がどのように働きかけるかは、「カサビアンカ」の横に同時代の作品だけでなく、現代までの海軍冒険小説、それらを原作とする映画などを置けば、より明らかになるだろう。シャーロック・ホームズとともに辞書に名前が載るところか伝記まで書かれたフォレスター (Cecil Scott Forester 1899–1966) の創り出した海軍士官候補生から提督に登りつめるホレイショ・ホーンブロウ (Horatio Hornblower) も、パトリック・オブライアン (Patrick O'Brian, 1914–2000) の海軍士官ジャック・オーブリー (Jack Aubrey) と親友の軍医で博物学者のアイランド人スティーヴン・マチューリン (Stephen Maturin) も、最初から青年として登場し、戦艦の少年兵はただの脇役である。オブライエンの小説を映画化したオーストラリア人ピーター・ウイアー (Peter Weir) の「マスター・アンド・コマンダー」 (*Master and Commander*, 2003) では、ナポレオン戦争中の 1805 年——トラファルガーの海戦の年——の南洋を舞台に、少年兵にも焦点があたり、戦死する少年、負傷して腕を切断する少年が印象的に描かれる。しかし、隻腕となったイギリスの少年は、ガラパゴス島の圧倒的に美しい自然の中で戦う博物学者になると決意するのである。12 歳で士官候補生として軍艦に乗り、戦闘で隻眼隻腕になったネルソンは、それまでの前線に出ない貴族の提督たちとは異なり、イギリス本国の人々が見たほぼ最初の戦争で体の一部を失った英雄であった。トラファルガー広場にある (片腕のない) ネルソンの銅像とヘマンズの詩の中の爆発で粉々に吹き飛んでしまったカサビアンカは、イギリス・

ロマン主義時代の戦争の記念碑の両極である。そして、女性も子ども含む一般の読者（観客）をターゲットにしようとしたヘマンズの想像力は、戦争で栄光、崇高とみなされるものの理不尽な暴力性を問い、戦争が忘れ去られようとする時、詩の結末の先へ、心臓と破壊された小片が韻を踏むことがない世界へ、読者のヴィジョンを誘うのである。

* 本論文は、関西コールリッジ研究会第 171 回例会（2016 年 9 月 24 日、同志社大学寒梅館）の特別講演「風に聞け——ナイルの海戦とイギリス・ロマン派詩人」の草稿を加筆・修正したものである。この機会を与えて下さった関西コールリッジ研究会、当日の議論を通して多くの学問的刺激を与えて下さった、小口一郎、勝山久里、金津和美、吉川朗子、阿部美春各氏をはじめとする参加者の方々に改めて深く感謝したい。また、論文として纏めるにあたって研究費を使わせていただいた日本学術振興会にもお礼を申し上げる。この論文は、平成 28 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「イギリス・ロマン主義のグローバルな多様性——ヨーロッパを越えた継承と変容」(課題番号 26370270) の研究成果の一部である。

注

- 1) 英語の場合「ナイルの海戦」という言い方がよくされるが、日本では「アブキール湾の戦い」としている場合が多い。
- 2) 1798 年 5 月アレクサンダー号艦長だったボールは、ネルソンの旗艦ヴァンガード号を悪天候から救い、ナイルの海戦に参加し、ネルソンと生涯親交があった。
- 3) この内容については後述。コウリリッジは、1804 年 4 月マルタに出発し、11 月までボールの私設秘書であった。1805 年 1 月に公的な秘書となった。
- 4) サウジーの *Life of Horatio, Lord Nelson* については、Geoffrey Callender が編集した *Southey's Life of Nelson* を用い、日本語では『ネルソン伝』と略記する。
- 5) ヘマンズは結婚後の姓であるが、慣例に従って、結婚前に Felicia Dorothea Browne として発表した作品も、「ヘマンズ」で言及する。“Casabianca”の引用は、Susan Wolfson 編の *Selected Poems, Letters, Reception Materials* (以下、*Selected Poems* と略記) による。詩の引用は行数で、ヘマンズ自身の註、ウルフソンの註やコメントについてはページ数で示す。
- 6) ヘマンズの詩の主人公は息子の方であり、Casabianca という名前は、詩のタイトルとヘマンズ自身がつけた註の “Young Casabianca, a boy about thirteen years old, son to the Admiral of the Orient” の 2 カ所のみ現れる (*Selected Poems* 428, 429 n.1)。
- 7) 例えば、Terry Coleman の *Nelson: The Man and the Legend* (2001) には、カサビアンカへの言及はないにもかかわらず、Geoffrey Moorhouse による 2002 年 1 月 5 日のガーディアン紙での書評のタイトルは “The man on the burning deck” という明らかにヘマンズの詩を意識したものであった。
- 8) 1815 年までのイギリス海軍史についての Eugene L. Rasor の詳細な *The Seaforth Bibliography* では、詩や小説も扱われているが、Hemans, Casabianca の名前は登場しない。
- 9) *The Naval Chronicle* については、Rasor の item no. 2605 を参照。1815 年以前についての重要な一次資料であり、軍人の家族を含む海軍関係者を読者として想定していた。また、Rasor が第 20 章で詳述しているが、ネルソンの活躍した時代の海軍を舞台にした後世のフィクション作家たちにとっては一級の資料となった。本論では、引用の際には、*The Naval Chronicle* と略記する。Clarke, McArthur については *ODNB* を参照。
- 10) *London Gazette Extraordinary* (Tuesday, October 2, 1798), *The Naval Chronicle* 1: 62–63 に再録。Berry の報告書は *The Naval Chronicle* 1: 43–60 に再録。

- 11) 以下、Clarke & McArthur と略記。1806 年には、James Harrison の *The Life of... Horatio Lord Viscount Nelson* が出版されているが、これは Emma Hamilton が出資し、部分的には影響力も振るったと思われるので、信用度は高くない。
- 12) この資料は、Sir Nicholas Harris が注釈をつけたもので、“Nicholas edition” と呼ばれることが多い。単語の語頭の大文字、小文字の違いなどいくつかの違いがあるが、文章は同じものである。本論文では Nicholas と略記する。
- 13) Alexander Ball 追悼のエッセイとボールの略伝は、『朋友』21号(1810年1月25日号)、22号(1810年1月31日号)が初出であり、1818年の『朋友』の3巻本のリプリント版では、第三巻“The Third Landing-Place, or Essays Miscellaneous”に収録されている。Barbara E. Rooke が編集した Bollingen 版の全集では、1818年のリプリント版が第一巻、1809–1810、1812年に発行された『朋友』は第二巻の“Appendixes”に収録されている。
- 14) *The Naval Chronicle* は、ヴィクトリー号に乗船していた複数の士官からの情報として、ロリアン号が降伏してから火災になったという証言を載せている (1: 259)。
- 15) この証言の出典は、従軍牧師だった Cooper Willyams が書いた *A Voyage up the Mediterranean in His Majesty's Ship the Swiftsure... with a Description of the Battle of the Nile* (1802) の 144 ページであり、該当箇所が引用されている。

That when some French officers arrived after the Action from their Commander in Chief, ostensibly to offer us a supply of vegetables, they declared, That Buonaparte had expressed indignation at our unfair use of Combustibles, by means of which L'Orient had probably been burnt: as a further proof of which, he asserted that his camp had been twice on fire from balls of an extinguishable matter, fired from one of the English gun-boats. Captain Hallowell immediately ordered his gunner to bring some up, and to declare whence he had them: The gunner replied, That they were found in le Spartine, after she was captured. (2: 83 note g)

サウジーやヘマンズは参照できなかったが、それまで未出版だったネルソンの書簡を複数所収している The Nicholas edition では、ネルソン自身はロリアン号が炎に包まれる前に降伏したと信じていたことを示す書簡を掲載している (Nicholas 3: 65)。

- 16) サウジーは『ネルソン伝』を書くにあたって、当時参照できる多くの資料を読んでいる。*The Quarterly Review* の 1810 年 2 月号に掲載している書評“Review of Works on Nelson”を参照。ここでサウジーが言及している Clarke たちの正式のネルソン伝、Charnock, Bowyer, Harrison らの著作については、Rasor の *The Seaforth Bibliography* の各著者の項を参照。
- 17) *The Naval Chronicle* 1: 250; Nicholas 3: 51 に再録。
- 18) The Nicholas Edition では、ネルソン文書の写しから“Translation of the French Rear-Admiral Branquet's Account of the Battle of the Nile”が再録されている。カサビアンカ父子については少し異なる記述がなされている。

[S]ome of the senior officers were abandoning ship as the fire reached the middle deck. Admiral Ganteaume, the chief of the staff, found a boat to take him to the frigate *Salamine* and thence ashore at Aboukir. Adjutant-General Motard swam to the nearest ship, which turned out to be the *Swiftsure*. Coomodore Casabianca, the captain, took to the water with his 10-year-old son, a cadet on the ship. They climbed onto a floating mast but soon perished. (3: 69–70)

ブランケともラシャヴァルディールとも違うもう一つの説として、カサビアンカ少年が足を砲弾で吹き飛ばされたため父の艦長が艦を去るのを拒否したという説が 20 世紀後半のネルソン伝にはしばしば登場する。例えば、Hibbert, 143、イギリス海軍でヴィクトリー号の艦長を務め引退後はネルソンの時代の研究をした David Harris が編纂した 18 世紀から 19 世紀の暦形式を模した *The Nelson Almanac* (113) などがあるが、いずれも一般向けの歴史書

という体裁で書かれているため、出典が記されていない。

- 19) 桂冠詩人 Henry James Pye (1745–1813) は、*Naucratica, or, Naval Dominion* をジョージ3世に捧げている。
- 20) William Sotheby, Charles Sotheby については、*ODNB* の“William Sotheby”の項目を参照。
- 21) サザビーの作品はページ数で言及する。
- 22) ボウルズの作品はページ数で引用する。
- 23) サウジーの『ネルソン伝』については、Geoffrey Callender が編纂した版の序文や註を参照。
- 24) ヘマンズは、女性であることに加えて、父がアイルランド系、母がイタリア系であり、1800年から一家の経済問題で北ウェールズに転居しており、「英国」の周辺と中心の関係に敏感であったと思われる。また、1810年、ヘマンズが17歳の時に、父は一家を捨ててケベックに去っており、後に夫のヘマンズ大尉が妻と五人の子どもをおいてイタリアに去ってしまうのであるが、家族を捨てる男性と家族のために職業人として自立する女性の問題を少女時代と結婚後の両方で体験している。
- 25) しかし、ヴィクトリア朝から20世紀前半までにヘマンズに定着したイメージのため本格的にヘマンズの研究が始まるまで少し時間がかかった。ヘマンズを受容史、特に再評価に至るまでの批評史については、Wolfson が選集につけた“introduction”を参照。
- 26) *The Domestic Affections* (1812) に“Written at the age of fifteen,”つまり1808年に書いたという但し書きをつけて収録している“War and Peace — A Poem.”では、ネルソンの壮烈な戦死を悼む一節がある (pp. 98–99)。
- 27) “When he [Nelson] died, it seemed as if no Man was a Stranger to another: for all were made Acquaintances by the rights of a common anguish. . . . [A]nd never can I forget the sorrow and consternation that lay on every Countenance. . . . Numbers stopped and shook hands with me, because they had seen tears on my cheek, and conjectured, that I was an Englishman; and several, as they held my hand, burst, themselves, into tears” (2: 365; 1: 574)。
- 28) 長兄の Thomas Henry Browne については *ODNB* の“Browne, Sir Thomas Henry (1787–1855)”を参照。トーマスは、1808年、マルティニーク島で重傷を負う。
- 29) ジョージは、戦後、1830年にアイルランドキルケニー州の治安判事となり、1831年にアイルランド警察長官となる。
- 30) フェルドマン (Paula R. Feldman) は、詩人と文学市場の関係についての画期的な論文の中で、ヘマンズが一般読者に読まれるために如何に手を尽くしていたかの早い頃の例として、1816年6月2日と1817年2月26日付けのマリーへ宛てた「もっと人気を得る」ための主題、スタイルなどについての助言を求める手紙を紹介している (Feldman 153; John Murray Archives)。しかし、詩人としての名声は家庭の不幸を運んでくることになる。1818年におそらく妻の名声に嫉妬して夫がイタリアへ去り、5人の息子と母親を養わねばならなくなる。
- 31) ウルフソンが作成したヘマンズの年表によれば、1823年には彼女の年収は普通の人の約4倍になるほど名声も富も獲得することになる (*Selected Poems* xxxvii)。1827年、ヘマンズは、ブラックウッドに当時で最も高額な原稿料を要求し、ブラックウッドはその要求に同意している (Feldman 162)。
- 32) *Edinburgh Review* 50 (October 1829), 32–47. *Selected Poems* 549–56 に収録。
- 33) フェルドマンが使っている資料は Blackwood の未出版の手紙である (Feldman 164–66; Blackwood Archives, National Library of Scotland, MS 30, 311, f.46)。
- 34) ウルフソンは出典を明らかにしていないが、頭註で姓名を明かしている。この少年の名は Giacomo Jocante Casabianca である (*Selected Poems* 428)。当時の海軍士官候補生の最年少は、

10歳から12歳の間ぐらいで、ネルソンは12歳の時に士官しているので、カサビアンカ少年が特別に幼かったわけではない。

- 35) ウフルソンは、頭注でサウジの『ネルソン伝』が“FH’s likely source, but with revisions”と述べている (*Selected Poems* 428)。 *Records of Woman* (1828) 収録の “Indian Woman’s Death Song” のクーパー (James Fenimore Cooper [1789–1851]) の *The Prairie* (1827) から取られたエピソードの例からもわかるように、ヘマンズは必ずしも出典に忠実ではない。クーパーの原文の当該部分は *Selected Poems* に引用されている (379.n.3)。
- 36) ヘマンズ自身の註の説明を読んでも、少年の父はロリアン号の艦長であるとわかるが、詩のテキストでは、「父」が艦長であることは、少年が必死で呼びかける「父」が軍隊の指揮官を意味する “chieftain” という言葉で言及される第四スタンザまで明かされない (15)。
- 37) *Records of Woman* (1828) に収録される (283–5)。
- 38) ネルソンを国民的英雄にしたナイルの海戦では、ネルソンの傷の手当てを優先しようとする軍医を制止して、ネルソンが “I will take my turn with my brave followers!” と言いつつ “[H]e became convinced that the idea he had long indulged of dying in battle, was now about to be accomplished” と思ったという有名なエピソードなど、ネルソン個人の高潔さを示すエピソードも多い (*The Naval Chronicle* 1: 259)。

参考文献

- Bowles, William Lisle. *Hope, an Allegorical Sketch, St. Michael’s Mount, Song of the Battle of the Nile, The Sorrows of the Switzerland, The Picture, The Grave of the Last Saxon, Ellen Gray*. Ed. Donald H. Reiman. New York: Garland, 1978.
- Bradford, Ernle. *Nelson: The Essential Hero*. London: Macmillan, 1977. Rpt. Wordsworth Editions, Ware, Hertfordshire, 1999.
- Byron, George Gordon. “Between Two Worlds”: *Byron’s Letters and Journals: Volume 7*. Ed. Leslie A. Marchand. London: Murray, 1977.
- Clarke, James Stanier, and John McArthur. *The Life of Admiral Lord Nelson, K.B. from Lordships’s Manuscripts, by the Rev. James Stanier Clarke, F.R.S. Librarian to the Prince, and chaplain of his Royal Highness’s Household, and John M. Marthur, Esq. L.L.D. Late Secretary to Admiral Lord Viscont Hood*. 2 vols. London: Cadell and W. Davies, 1809.
- Coleman Terry. *Nelson: The Man and the Legend*. London: Bloomsbury, 2001.
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Friend*. Ed. Barbara E. Rooke. 2 vols. The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge 4. Bollingen Series 75. Princeton UP, 1969.
- Curran Stuart. “Romantic Poetry: The I Altered.” *Romanticism and Feminism*. Ed. Anne K. Mellor. Bloomington: Indiana UP, 1988.
- Feldman, Paula R. “The Poet and the Profit: Felicia Hemans and the Literary Marketplace.” *Keats-Shelley Journal* 46 (1997): 146–76.
- Fraser, Stewart M. “Browne, Sir Thomas Henry (1787–1855).” *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004 [http://www.oxforddnb.com/view/article/55948, accessed 17 Sept 2016]
- Harris, David and Anthony Cross, ed. *The Nelson Almanac: A Book of Days Recording Nelson’s Life and the Events that Shared his Era*. London: Conway Maritime P, 1998.
- Haythornthwaite, Philip J. *Who Was Who in the Napoleonic Wars*. London: Arms & Armour, 1998.
- Hemans, Felicia. *The Domestic Affections 1812*. Rpt. Revolution and Romanticism, 1789–1834, A Series of Facsimile Reprints Chosen and Introduced by Jonathan Wordsworth. Poole: Woodstock, 1995.
- . *Felicia Hemans: Selected Poems, Letters, Reception Materials*. Ed. Susan Wolfson. Princeton: Prince-

- ton UP, 2000.
- Hibbert, Christopher. *Nelson: A Personal History*. Cambridge, Mass. Perseus Books, 1994.
- Lambert, Andrew. ODNB, “*Nelson’s band of brothers [act. 1798]*”
- Laughton, J. K. “Clarke, James Stanier (1766–1834).” Rev. Roger Morriss. *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edn, Jan 2012 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/5504>, accessed 18 Sept 2016]
- . “McArthur, John (1755–1840).” Rev. Nicholas Tracy. *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edn, Jan 2008 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/17338>, accessed 18 Sept 2016]
- Lee, Sidney. “Sotheby, William (1757–1833).” Rev. Melanie Ord. *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/26038>, accessed 9 Oct 2016]
- Lootens, Tricia. “Hemans and Home: Victorianism, Feminine ‘Internal Enemies’, and the Domestication of National Identity.” *Victorian Women Poets: A Critical Reader*. Ed. Angela Leighton. Oxford: Blackwell, 1996. 1–23.
- Master and Commander: The Far Side of the World*. Dir. Peter Weir. Universal Pictures, 2003. Film.
- Moorhouse, Geoffrey. “The Man on the burning deck.” Rev. of *Nelson; the Man and the Legend* by Terry Coleman. *The Guardian* 2002.1.5: n.pag. Web.
<https://www.theguardian.com/books/2002/jan/05/biography.historybooks>. Accessed 9 Oct. 2016.
- Nicholas, Harris Nicholas. *The Dispatches and Letters of Vice Admiral Lord Viscount Nelson, with Notes*. 7 vols. London: Colburn, 1846–47.
- The Oxford English Dictionary online*. <http://www.oed.com/>
- Rasor, Eugene L. *The Seaforth Bibliography: A Guide to More Than 4,000 Works on British Naval History 55BC–1815*. (First published as *English / British Naval History to 1815*. 2004.) Barnsley: Seaforth, 2008. Kindle edition. n.p.
- Sotheby, William. *Poems; The Battle of the Nile; A Song of Triumph; Farewell to Italy*. Ed. Donald. H. Reiman. New York: Garland, 1978.
- Southey, Robert. “Review of Works on Nelson.” *The Quarterly Review* 3 (Feb. 1810): 219–62.
- . *Southey’s Life of Nelson*. Ed. Geoffrey Callender. 1922. New York: AMS P, 1973.
- Sweet, Nanora and Julie Melnyk. “Introduction: Why Hemans Now?” *Felicia Hemans: Reimagining Poetry in the Nineteenth Century*. Ed. Nanora Sweet and Julie Melnyk. London: Palgrave, 2001. 1–15.
- Tracy, Nicholas. “Editor’s Preface.” *The Naval Chronicle: The Contemporary Record of the Royal Navy at War*. Vol. 1. 1793–1798. London: Chatham, 1998. vii–xi.
- . “Introduction” *The Naval Chronicle: The Contemporary Record of the Royal Navy at War*. London: Chatham, 1998. vi.
- , ed. *The Naval Chronicle: The Contemporary Record of the Royal Navy at War*. Vol. 1. 1793–1798. Vol. 2. 1799–1804. London: Chatham, 1998.
- , ed. *The Naval Chronicle: The Contemporary Record of the Royal Navy at War*. Vol. 2. 1799–1804. London: Chatham, 1998.
- Wolfson, Susan. “Introduction: Felicia Dorothea Browne Hemans 1793–1835.” *Felicia Hemans: Selected Poems, Letters, Reception Materials*. Ed. Princeton: Princeton UP, 2000. xiii–xxix.
- , and Peter Manning, ed. *The Longman Anthology: British Literature Volume 2A: The Romantics and Their Contemporaries*. 4th ed. London: Longman, 2010.